

小学校外国語活動の導入で入門期がこう変わる

酒井英樹

(信州大学)

1. はじめに

本稿では、小学校「外国語活動」と中学校「外国語」の関係から学習指導要領を紹介しながら、中学校の入門期がどう変わっていくかを考えていきます。

2. 「外国語活動」と「外国語」の関係

新学習指導要領において、小学校5・6年生で週1時間の「外国語活動」(英語を取り扱うことが原則)が新設されることになりました。教育課程上、教科として位置づけられていない外国語活動と、教科の1つである中学校の外国語の関係をどのように捉えたらよいのでしょうか。小学校の外国語活動の目標は、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」(以下、下線は筆者による)となっています。下線部分が中学校の外国語の目標と異なる文言ですが、基本的には外国語活動と外国語の目標は類似しています。これは小学校と中学校の接続を意識したものと考えてよいでしょう。

小・中学校の接続については、中学校の外国語の、第1学年の指導に当たっての配慮事項に、「小学校における外国語活動を通じて音声面を中心としたコミュニケーションに対する積極的な態度などの一定の素地が育成されることを踏まえ」と明記され、また、学習指導要領公示に伴って出された通知には、小・中学校の主な改善事項に「外国語教育の充実」が挙げられ、その中で「小学校高学年に外国語活動を導入したこと」に触れられており、「外国語活動」は「外国語」につながる時間であることがわかります。

3. 言語や文化に関する体験的な理解

小学校学習指導要領・外国語活動では、言語や文化に関する体験的な理解に関し、指導する内容として、(1)「外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付くこと。」、(2)「日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気付くこと。」、(3)「異なる文化をもつ人々との交流等を体験し、文化等に対する理解を深めること。」という事項が挙げられています。

外国語活動の補助教材である『英語ノート(試作版)』には、言語や文化に関する活動や題材がたくさん扱われています。例えば、バナナという外来語が英語ではどういう音になるのか注意させるような活動があります。音声を聞いたり、発音したりしながら、「日本語と英語の音声って違うんだな」と体験的に理解するわけです。また、数えるときの記録方法として、日本では「正」の字を書きますが、アメリカでは4本縦線を引き、最後に斜線を左上から右下に引く方法をとります。中国や韓国ではどんな方法をとるのでしょうか。実際に、それぞれの方式で数えながら、中国や韓国では「正」の字を使うという共通性や、アメリカは異なる方法をとるという文化の多様性を体験的に理解していくことになります。

小学校で体験的に理解したことを踏まえて、中学校では、さらに「公正な判断力」や「豊かな心情」、言語や文化を「尊重する態度」、そして「国際協調の精神」を養うことを目指すことになります。

4. 音声や基本的な表現に慣れ親しむこと

中学校外国語の「各言語の目標」に関して、現行

学習指導要領は「英語を聞くことに慣れ親しみ, 初歩的な英語を聞いて相手の意向などを理解できるようにする」と「英語で話すことに慣れ親しみ, 初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話すことができるようにすること」でしたが, 新学習指導要領では下線部分が削除されました。つまり, 英語を聞く話すことについては, 小学校の段階で「慣れ親しむ」は達成できているということを示しています。

5. コミュニケーション・言語の使用場面と働き

言語の使用場面と働きが, 現行中学校学習指導要領において導入されました。新学習指導要領において, 言語の働きで, その分類の仕方に変更が見られます。3分類であったものが, (1) コミュニケーションを円滑にする, (2) 気持ちを伝える, (3) 情報を伝える, (4) 考えや意図を伝える, (5) 相手の行動を促す, という5分類になっています。

この分類は, 外国語活動における「コミュニケーションの働き」と対応しています。外国語活動では, 内容の取扱いの配慮事項として, 「言葉によらないコミュニケーションの手段もコミュニケーションを支えるものであることを踏まえ」と書かれています。つまり, 小学校では, コミュニケーションにおける働きを理解したり, その働きを(言葉によらなくても)果たしたりすることができる力や, これらの機能を積極的に果たそうとする態度が育成されると考えられます。例えば, 児童が How are you? と尋ねられたとします。ある児童は, I'm sleepy. と文を表出して自分の気持ちを伝えるかもしれません。あるいは, Sleepy. と単語だけで表現するかもしれません。別の児童は, 表情やジェスチャーをして I'm sleepy. ということを伝えるかもしれません。これらの児童が「自分の気持ちを伝える」というコミュニケーションの働きを積極的に果たそうとしている態度が重要です。このように, 小学校では, 微笑んで「コミュニケーションを円滑にする」という働きを遂行したり, 手を引いて道案内をして「相手の行動を促す」という働きを果たしたりするなど, 言葉によらないコミュニケーションであっても積極的に図ろうとする態度の育成が目標とされています。言葉によってこれらの働きを果たす力を身につけるのは,

中学校の段階であると考えられます。小学校において「手を引いて道案内をする」という積極性が素地となって, 中学校では Go along the street to the station. や Turn left at that corner. といった英語表現を使って道案内をするコミュニケーション能力の基礎が育成されるということになるわけです。

6. 入門期がどのように変わるか

では, 中学校入門期における指導がどのように変わっていくのでしょうか。まず, 音声から文字へとという指導の流れがますます基本となると思います。小学校「外国語活動」において, ALT・学級担任・英語専科教員の英語や, CD・DVDなどの英語に触れ, 英語の音声や基本的な表現に慣れ親しんできます。聞かされる英語のすべてを理解できなくても, (1) 非言語的情報, (2) 既存の一般的知識, (3) 既習の英語知識, などを手がかりにし, メッセージを大体理解する力を身につけてきます。そのような生徒には, 日本語ばかりの一方的な講義調の授業ではなく, 音声を十分に使いながら, 英語を正確に理解する力に発展させたり, 音声から文字への橋渡しをスムーズに進めたりすることが必要になると考えられます。

次に, 表現や語彙によって導入方法や指導方法を変えていく必要があると考えられます。『小学校外国語活動研修ガイドブック』によれば, 『英語ノート』で取り扱われる主な語彙に約340語挙げられています。これらの外国語活動で扱われる語彙や表現と中学校で初めて触れる語彙や表現の間で指導方法が一緒であることは, 効率がよくありませんし, 生徒の学習意欲を減退させる可能性もあります。また, 中学校では, 言語材料の取扱いとして, 「発音と綴りとを関連付けて指導すること」とされています。生徒が英語の音声にどの程度慣れ親しんでいるかを見極めながら, 発音と綴りの関係の指導が求められます。

7. おわりに

各小学校において実践内容が異なることも予測されます。小学校外国語活動で, どのような活動を通して言語や文化に対する体験的な理解を深めてきたか, どのような英語の音声にどの程度触れてきたか, 小中学校の情報交換が不可欠になるでしょう。